



【サムライの精神】

功は部下に譲り、部下の過ちは自らが負う――。

『文芸春秋』8月号をペラペラとめくっていたら、こんな言葉が目にとまりました。これは、亀田製菓副社長の小寺芳朗氏について語ったエッセイですが、この言葉を見た瞬間、戦前、総理大臣を務めた広田弘毅を描いた城山三郎の『落日燃ゆ』の一節が想いだされました。

ある時、広田が神奈川県の鶴沼に別荘を建てようと土地を探していると、市役所から「そこは道路が通じていませんので、あなたが別荘をお建てになるのであれば、道路を造ってさしあげましょう」との申し出がありました。ところが、広田は「私のために道路を造るといなら御免被る」と一言のもとに断ってしまったそうです。



権力の座に座ると私利私欲に走り、自己の栄達のために便宜を図ろうとする人間がいつの世にもたくさんいるものですが、こうした高潔の士の言動は、なんとも清々しいものです。

第33代合衆国大統領トルーマンは、「The buck stops here.」(責任は私が取る。)という表現をよく使ったそうですが、功は自分の手柄とし、失敗は部下に押しつけるといった出世欲と特権意識に満ちたリーダーが牛耳っているような組織にあっては、その座右の銘も「The buck stops there, though.」(責任を取るのは、君だけだね。)と、勝手に書きかえられているのかもしれませんが。

三井物産代表取締役社長を務めた石田禮助は「山猿」と自称し、後に国鉄総裁まで務めて、相手が国会議員だろうと一歩も引かないほど土性骨の座った人物でしたが、

その石田が、「僕は、粗にして野だが、卑ではないつもりだ」と自分のことを評しています。つまり、言動は無作法で洗練されてはいないが、けっして「卑しい人間」ではない、ということです。

新渡戸稲造の『武士道』にも「武士の教育における第一は品性を建てるにあり」とあって、知識や武道などは付随的地位を与えられていたにすぎなかった、と記述されています。武士にとって地位・名誉・権力・財産などは、いわば借物の「洋服みたいなもの」で、そのようなものに執着するのは、武士の風上にも置けない人間ということでしょう。

鎌倉時代の禅僧道元は「今、我が国には小人多し」(『正法眼蔵随聞記』)と語っていますが、その「今」というのは約800年も前のことです。ましてや現代では、集まっては人の悪口を言う「小人」(つまらない人間)も大勢いるにちがいありません。これを作家の平林たい子に言わせれば「メダカはとかく群れたがる」とでもなるのでしょうか。

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』に登場するの糖陀多は、せつかくお釈迦様が垂らしてくれた蜘蛛の糸を、みずからのエゴの重さによって切ってしまうとたびたび地獄へと落ちていきましたが、これなども卑しさゆえの行為と言えましょう。

校歌にも謳われている「正義・真理の殿堂」で学ぶ明星健児は、五正道(正しく見る、正しく聴く、正しく考える、正しく言う、正しく行う)を実践するためにも、読書を通して人間力を錬磨し、品性のある人間を目指してもらいたいものだと切に願っています。



【萌音さんに会ってきました!?～言葉と心を育てる読書】

8月に続いて司書3名と川辺先生で、子供の読書活動推進事業～フォーラム「言葉と心を育てる読書」(主催: (独) 国立青少年教育振興機構)を聴講してきました。

オープニングは、活字が大好きという俳優・上白石萌音さんのミニトークと朗読。読書は生活になくてはならないもの、凝り固まった思考をほぐしてくれると話す彼女は、声に出したり、主人公になりきって本を読んだりするそうです。朗読は辻村深月さんの絵本『すきっていわなきゃだめ?』。上白石さんの透明感あふれる温かい声に包まれ、素敵な時間をいただきました。読書の魅力は「遠くへ行けたり、知らない人に会えたり、世界が広がったり…と、とにかく楽しい!!」と笑顔でお話されていました。



続いて第一部は発達心理学などが専門で、ベネッセこどもチャレンジの監修にも携わる内田伸子さんの講演。特に印象深かったのは、学力格差と経済格差は関連がない、ということです。親や保育者が、いかに子どもの主体性を大事にした関わり方をしているかが肝心であり、絵本の読み聞かせはとても重要である。想像力を広げ、共感や思いやりなど目に見えない力を養い、AIにも負けない力を育む、ということでした。

第二部は内田さんをコーディネーターに、辻村深月さん、ひきたよしあきさん、柳田邦男さんによるシンポジウム。心の発達遊びから入ることが大切で、読み聞かせは子供の心を育て、対人コミュニケーションを発達させる、「いいな」と感動したら何度も読み返す、読むたびに印象が違って来る等々、絵本にまつわる奥深いお話をたくさん聞くことができました。最後に4人の登壇者から”子どもの頃に感動した本”の発表がありました。右記はその本とフォーラム中に紹介された本の一覧です。

新型コロナの影響で、読書の時間が増えているそうです。良い作品は何度読んでも新しい気づきがあり、人生を豊かに耕してくれる、「名作には宝石が潜んでいる」とも。閉塞感が漂うこの頃ですが、読書は想像の世界を自由に飛びまわることができます。

絵本やお気に入りの本を読み返したり、話題本を手にとったり…、読書の秋を楽しんでみてはいかがでしょうか。

紹介ステージ	タイトル	著者
上白石さん朗読本	『すきっていわなきゃだめ』	辻村深月
内田さん講演	『銀河鉄道の夜』	宮沢賢治
	『AIに負けない子育て』	内田伸子
	『復活の日』	小松左京
	『みかん』	芥川龍之介
	『さんねんないきもの事典』	今泉忠明
	『冷たい校舎の時は止まる』	辻村深月
	『からすのパン屋さん』	加古里子
	『はじめてのおつかい』	林明子
	『こんとあき』	林明子
	『きょうはなんのひ?』	林明子
シンポジウム	『おおきなかぶ』	ロシア昔話
	『おおきな本』	S・シルヴァスタイン
	『人生の1冊の絵本』	柳田邦男
	『モモ』	M・エンデ
	『蜘蛛の糸』	芥川龍之介
子どもの頃に感動した本	『フランダースの犬』	ウィータ
	『ジェーン・エア』	S・ブロンテ

【国連世界食糧計画(WFP)のレッドカップキャンペーン】

2020年のノーベル平和賞が、国連世界食糧計画(WFP)に授与されることが発表されました。授与理由は、世界各地で飢餓と闘い、平和実現のための条件改善に貢献したことが挙げられました。

図書館では、中高生に向けたコンテストやコンクールの情報を取りまとめて、発信しています。今年度、国連世界食糧計画(WFP)が実施している「WFP チャリティーエッセイコンテスト2020」に中学3年生と高校1年生が学年全体で、その他の学年(高3を除く)は希望者が応募しました。このコンテストは、毎年食に関するテーマが発表になり、そのテーマに関するエッセイを応募します。応募1作品につき、途上国の給食3日分(90円)が、寄付協力企業より国連世界食糧計画(WFP)に寄付され、学校給食支援に役立てられます。今回、約500名が明星から応募したことで、約1,500日分の支援につながりました。

「レッドカップキャンペーン」はご存じの方もいらっしゃると思いますが、右のイラストのついた商品を購入することで、日常生活の中でも参加できます。今年度より学校全体で取り組んでいるSDGs(持続可能な開発目標)の「2 飢餓をゼロに」をはじめ、多くの目標へつながります。お買い物の際に赤いマグカップを見つけて、支援の輪に参加してみたいでしょうか。

